

「理性」と「情念」はいかにして戦うか

石川 徹

Abstract

The aim of this paper is to elucidate the relation of “reason” and “passion” in Hume’s philosophy by examining his interpretation of the alleged “the combat of passion and reason” as conflict between “violent passions” and “calm passions”.

Firstly, we point out that the combat takes place only in some kinds of actions. Secondly, we examine Hume’s position by interpreting his famous statement “Reason is the slave of passions”. We find that Hume oversimplifies the relation between reason and passion and particularly he misconceives how reason could influence passions. We conclude that Hume’s argument can and should be rebuilt by reconsidering the relation between reason and passion in human conduct.

デイビッド・ヒュームの哲学体系においては、彼の主著である『人間本性論』^①の基礎論であるとされる第一巻と第二巻がそれぞれ「知性について (Of the Understanding)」と「情念について (Of the Passions)」となっているように、「知性」(ないし「理性 (Reason)」)と「情念」は人間本性の持つ基本的な二つの領域である。それらは、それぞれ独自の取り扱いを必要とする独立した能力であると考えられているが故に、このように叙述されているのである。しかし、一方でこの二つの能力はそれぞれ固有の働きを持つとはいえ、全く独立無縁で働いているというわけではない。本論文では、古来から「情念と理性の戦い (the Combat of Passion and Reason)」と呼び習わされている現象に関して、ヒュームがどう答えているかを検証してみることで、この二つの能力の関係についてのヒュームの見解を批判的に検討することを目的とする。

I

「理性」と「情念」が精神の独立した機能であ

る、あるいは異なった側面であると考えられているのは衆目の一致するところである。数学の証明を行う能力と、喜怒哀楽を感受したり、異性を恋い慕ったりする精神の動きが、精神の同じ能力によるものであると主張するものはいない。しかし、人間のなす一つ一つの事柄を見れば、この両者の関係が截然と区切られるものではないということは直ちに分かる。我々が、理性的判断に基づく意志決定だと思っているものが、その決定によって影響を受ける他者に対する好意や憎しみによって偏りを受けているといった場合や、我々が何らかの被害を受けた場合に、その害を起こした原因が、不可避の自然の原因によるものか、他者の過失や悪意によるものか、その認識によってわれわれの持つ感情が大きく変わってしまうといった事例などが、それを例証している。しかし、また同時に今取り上げた事例では、基本的には「理性」や「情念」のどちらかが基本的であり、もう一方はそれに対して何らかの影響力を行使しているという場合のように見える。「理性と情念の戦い」とい

うような、両者の主導権争い、すなわち、どちらも主導的な立場を場合によってとりうる、というようなことを連想させるような事例とは必ずしも言えない。それ故、まず「理性と情念の戦い」という道徳哲学においてきわめてありふれた題材であるとされる事態^②が正確にどのようなものであるかということ、を、まず確定し、しかる後にそれをヒュームがどのようなものと解釈したかを考察することにしたい。また同時に、これが道徳哲学における問題であるとされるのは、道徳の起源が理性であり、したがって道徳的に振舞おうとする人間の精神を動かしているものは理性であるという一つの強力な哲学的立場に由来するものである^③。したがって、この問題を取り扱うために必要な要件としては、人間を行為へと至らしめるものが何であるか、という問題だけでなく、人間の行為を動かす有力な要因である道徳の起源に関する論考を含むことになる^④。そこで、本論文では、この二つの点に関するヒュームの論考を参考にしつつ、ヒュームが「理性と情念の間の戦い」に対してどういう解釈を与えているかを祖述した後、そのことがヒュームの持つ理性と情念の間の関係についての考えの問題点を示唆しているという事を明らかにしたい。

II

理性と情念の間の関係については、ヒュームには、まず問題とすべき有名な一文がある。「理性は情念の奴隷であり、またただそうであるべきである」(T415/2.3.3.4) というのがそれである。この一文だけが取り出され、一人歩きすることになってしまうが、もちろんそうではない。理性ないし知性の固有の領域である幾何学の証明や因果推理などに関して情念が理性に対して命令を下しているとか、理性がそれに従い、推論の結果を変えるなどということはもちろんヒュームも考えていない。先に述べたように、ヒュームの哲学体系においては、理性と情念はまずはっきりと区画され、別々に論じられて、それぞれに固有の解明をされているのであ

る。したがって、この文は極めて限定的にとらえられる必要があるのはいうまでもない。そして、その限定されるべき領域が、人間の行為を何が動機付けるかという行為の心理学であることも自明である。しかも、実際にはこの領域においても、無条件に受け取ってしまうわけには行かない。このことをまず明らかにするために、理性と情念に関して、それらがヒュームの哲学的体系の理論的装置である観念説の上でどうなっているかを確認しておこう。

『人間本性論』の第一巻においても、第二巻においても、まず最初に「主題の区分 (Division of the Subject)」と言う節が置かれ、それぞれの巻の主題が限定されている。そしてその限定は、観念説^⑤という装置に基づいて行われる。すなわち「知性」を主題とするときは「印象 (Impression)」の「写し (Copy)」である「観念 (Idea)」がその探究の対象となり、「情念」の場合は「二次的 (Secondary)」ないし「反省的 (reflective)」印象が問題とされるのである。したがって、ヒュームの理論はまずこの様な特徴づけに基づいて展開されているはずであるということをしつかりと心に留めておかねばならない。

ヒュームの「理性」ないし「知性」の用法は多岐に及ぶ。最も広義に理解した場合には、外界認識に対する最終的根拠としての感覚印象まで含むことがあるが、先に述べたように、一般的には「観念」を再現したり、分離結合したりする能力として記述される。しかしもちろんこれだけでは不十分である。なぜなら、単に「観念」を対象とする能力であるならば、「想像力 (Imagination)」こそが、この定義に最もふさわしい能力であり、「理性」や「知性」がこれと区別される理由が不明だからである。したがって、「知性」や「理性」は単に観念を操作するだけではなく、我々が様々な事柄を理解してそれに対する「真理」ないし「正しい信念」を獲得する能力であると考えられる。ヒュームの用語法により即して言うならば、何らかの意味で確立された信念を得る能力といった方が良いかもしれない。それ故にヒュームにおいては、知

性は「想像力の一般的でより確立された属性」(T267/1.4.7.7)と述べられるのである。理論の細部においては、様々な解釈の余地は残っているが、ヒュームは我々の日常語の「理性」ないし「知性」という語のある部分を「観念」という語を使って再構成することで、それらの役割を明確に限定し、また日常語の用法を批判したのである。

以上のような考え故に、「情念」ないし「感情」は「知性」とはっきり区別される。なぜなら、これらは「印象」であり、「印象」はそれ自体直接に操作可能な対象とは考えられていないからである。それは、感覚印象ばかりでなく反省的印象についても同様である。もちろん一方で、ヒュームは「印象」と「観念」の質的相違を絶対的なものと考えずに、「生氣と勢いの程度の差」に還元するという立場を堅持している。しかしながら、彼の実際の議論に即してみれば、印象と観念の相違に関しては、それらの果たす理論的役割が厳然として相違しており、この相違を単なる程度の相違に帰してしまうことは難しいので、印象と観念が質的に相違しているということを今後の議論の前提としておくことに問題はないであろう。

ただし、「情念」が「二次的印象」、「反省的印象」と言われていることは、「知性」との関係でもう少し考察しておかなければならない。「情念」は根源的な存在(Original Existence)には違いないが、あくまで「観念」に対する反応あるいは結果として生じるものである。その点で「感覚印象」とは異なり、その原因に関する因果的探究が観念説の内部で可能なものである。そして、その様な原因となる観念は、一般的には単なる想像の観念ではなく、「知性」によって裏打ちされた信念、すなわち少なくともその所有者にとっては「現実」^⑧を構成する観念であるか、あるいは、蓋然的な推論によって導びかれた観念であるはずである。したがって、情念は一部を除いて^⑨「知性」の働きを前提としているということが出来る。「情念」と「反省的印象」の外延が同じかどうかという問題は一考の価値がある。ヒュームは情念を「反省的印象」

として定義しているの、問題は「反省的印象」の中に情念以外のものが含まれるかどうかということであるように思われるが、それだけではなく、ヒュームはいわば人間本性の中に埋め込まれたものとして幾つかの情念を考えている。また「意志」の場合のように種々の精神的な働きにも内的印象が伴っていると考えており^⑩、さらには全ての観念には何らかの情動が伴っているということまで述べているので、「反省的印象」の外延はヒュームが「情念」として考察の対象としているものよりも、はるかに大きいといわざるを得ない。

「情念」が、「観念」しかも単なる観念ではなく何らかの意味で「現実」を構成する観念を原因として生じる(あるいは少なくともその様な因果モデルが情念解明の際の基本的モデルである)と考えられるとすると、「理性は情念の奴隷である」という表現は、相当に解釈に慎重を期すべきものだと考えられる。先にも述べたように、ここでの理性や情念は理性一般、情念一般ではないと考えるのが妥当である。ここでの問題は、何よりも行為とその動機、あるいは、人間を行為へと導く原理が何かということであると限定しておかなければならない。

ヒュームがこのような表現をとるのは当然のことながら、「人間は理性によって感情を支配しなければならない」という一般的な考え方を意識してのことではあろう。しかし、このような表現も、必ずしもストア派のアパティアのような感情そのものに動かされない精神のあり方を推挙するものではなからう。むしろプラトンに見られるように^⑪、情念は馬車を引っ張る馬であり、理性は御者であるとする比喩が最も適当であるように思われる。理性は、馬が目標から逸脱しないように注意を払うが、馬車自体の推進力は情念が担うのである。そして、このような意味で理性が情念のあり方を規制すること自体は、ヒューム自身が一部認めていることでもある。

また、ヒュームの批判者であるトマス・リードが言うように^⑫、人間の欲求を満たす意志的な行動が、少なくとも欲求の対象の認知とそこ

に至る方法の選択ということにおいて、ある程度の理性を必要としているということは否定すべくもない。ヒュームが情念の大半を二次的な印象として規定していることも、結局においてこのことを認めているように思われる。したがって、「理性は情念の奴隷である」という表現は、理性が情念の命ずるままに動くということを意味しているわけではない。してみると、やはり理性は情念という馬を制御している御者の役割をしていることになるのではないか。少なくとも自己利益に対して慎重に配慮して行動するという意味での「賢明さ (Prudence)」は理性の役割ではないか。このような反論に対しては、ヒュームはおそらく次のように答えるであろう。「確かに、理性は行為の様々な局面で、欲望を方向付ける役目を果たしているように思われる。しかし、それはあくまでも本来の目標に合致するように、種々の欲望を統制する働きであり、目標を定めるということそれ自体は、理性の役目ではなく、情念の仕事である。」このような考えからは、理性は最終決定権のない顧問や相談役、あるいは与えられた課題に答えるだけの単純なコンピュータといったところの役割を担うということになるだろう。奴隷よりはましではあるが、とにかく最終的な主人は情念なのである。

このようなヒュームの回答に対しては、やはり次のような批判がすぐ思いつかれるであろう。すなわち、ヒュームは「理性」の範疇を不当に制限し、この範囲に入らないものを全て、「理性」ではないのだから「情念」であるという二分法によって、「情念」に帰属させ、「情念」という語を不当に使用しているだけではないのかという疑問である。リードのヒューム批判もまさにこの点をついている。ヒュームがこの批判にどう答えるかを、「理性と情念の戦い」という話題に即して考察してみよう。

III

「理性と情念の戦い」という語句は、先にも触れたように、我々の精神におけるある種の内的葛藤の表現である。しかし、内的葛藤の全て

がこの言葉で呼ばれるわけではない。この言葉にふさわしいのは、先ほども挙げた、自己の最善の利益への配慮という賢明さと、自己の利益は勘定に入れない道徳ないし正義の追求、という、この二つが衝動的欲望と衝突する場合であると思われる。この二種類の場合についてヒュームはどう考えているだろうか。

ヒュームの回答は、次のようなものになるだろう。そもそも理性は情念とは対立し得ない。なぜなら、理性は単独では行為を導く力を持たないからである^⑧。したがって、理性と情念の対立葛藤というものがあれない以上、常に対立するのは情念同士、さらに正確に言えば、異なる方向に向いた欲求同士でなければならぬ。情念と理性の対立といわれるものも例えば、同じ強さの欲求の間で動けなくなるブリダンのロバと質的には全く差がないことになる。にもかかわらず、我々がその一方を「理性」と呼びたくなるのは、それが理性と取り違えたくなくなるような穏やかさで精神に影響を与える、^⑨「穏やかな情念 (Calm Passions)」であるからに他ならない。

この回答は、ある種の論理的な明快さを持つてはいるが、しかし、先に述べたリードの批判に対して、これだけでは答え得ていないように思われる。すなわち、ヒュームは「理性」という語の適用範囲を過度に小さく見積もり、その区画に入らないものを「情念」に振り分けているだけではないのか、ここで言う「穏やかな情念」とは何ら積極的な規定を持たず、「理性ではない」という消極的な規定しか持たないのではないかという疑いが生じるのである。この疑いに対して、ヒュームはどれだけのことを言っているのか、そのことを検討してみることで、ヒュームの考える「理性」と「情念」の関係について、考察しなおして見ることにしよう。

まず第一に、「穏やかな情念」についてヒュームが何を言っているかを確認しておこう。情念を「激しい」と「穏やかな」ものに区分することは、情念論の最初の節で導入される。「穏やかな情念」というのは形容矛盾に過ぎないというリードの批評もあるが、ヒュームが「情念」

をまず「反省的印象」としてとらえている以上、この批判は当たらないと思われる。「反省的印象」が必ず精神に強い動揺を与えるとは限らないからであるし、同種の感情に強弱の程度が存在することを認めることは不都合ではないからである。しかし、ヒュームはここで、単に精神に与える動揺の強さのみでこの区分をしているのではないように思われる。「第一の種類（穏やかな情念）は行為、文芸作品、外的対象における美醜の感覚である。第二の種類（激しい情念）は愛と憎しみ、悲しみと喜び、誇りと卑下である。」(T276/2.1.1.3) ここでの例示は、明らかにこの区別で種類の異なる情念を示しているように思われる。しかし一方で、この区別は程度の差であり、情念は激しくなったり、穏やかになったりすることが出来るとも述べている。つまり、ヒュームのこの区別は、一般的に穏やかであることが多いある種の情念と、激しいことが多い、つまりは普通の意味での情念との間の種別区別を示そうとしたものか、あるいは純粹に強弱の程度の差に基づいた区別なのかという点が曖昧なままに残るのである。しかし、この文脈では、この区別は種別区別として受け取るべきである。そうでなければ、「理性」と取り違えるような種類の情念というヒュームの言葉を理解することが極めて困難になるからである。先に述べたように、「理性」と「情念」の戦いということが、一般的な欲求同士の戦いと区別される文脈は二つである。決してあらゆる欲求の対立が問題となるわけではないのである。これらの文脈では、もし「理性」で代表されるものが欲求であるとしても、他の欲求と何らかの質的区別を持っていると考えるべきであるから、ヒュームの言う「穏やかな情念」が少なくともこの場合には、単なる激しさの程度の少ない情念と考えることは不適切であろう。

「穏やかな情念」ということでヒュームが語っているのはこれに加えて、「穏やかさ」、「激しさ」という尺度が決して行為に及ぼす影響力の「強さ」、「弱さ」とは一致しないということである^⑧。これによって、「穏やかな情念」が「激しい情念」を抑えるということがありうるこ

として正当化される。しかし、このような「強さ」が何に起因するものかは説明されない。もちろん、この事は説明のあるなしに関わらず事実として受け入れられるべき問題であると主張されるであろう。しかし、ヒュームにおいては、情念は直接感じられる印象である。すなわち、その特質は基本的に意識において現われているものでなければならないはずのものである。行為に対する影響力という結果でしか測れないものの存在を主張する根拠は薄いといわざるを得ない。

さて、「理性」が道徳的な感情を意味している場合をまず考察してみよう。但し、この論点自体は、道徳の起源を何であるかと考えるかという問題ときわめて密接に関係するので、厳密に論ずるためには、ヒュームの道徳論全般に言及することが本来は必要であるが、ここでは、その問題は最小限にとどめ、それがいわゆる情念とどのような仕方に対立するかという事柄に限定して考察を進めたい。

このように話題を限定したとしてもなお、「理性」と「情念」の対立は様々な事例が考えうる。しかし、ここではあまり複雑なケースは考えずにおくことにする、なぜならここで我々が問題にしているのは、あくまで理性と情念の関係であり、人間の道徳的な行為や判断をめぐる複雑な問題の解析ではないからである。例えば、次のようなケースを考えてみよう。「人気がない道路で現金入りの財布を拾う。そのまま着服したいという欲望が生じるが、理性は警察に届けよという。」「目の前に怪我をした老人がいる、手助けをするべきであるということが道徳的に正しいと思うが、関わるのが嫌なので立ち去りたいと思う。」これらのケースが「理性」と「情念」の対立の標準的な事例の一つであるといっても、さして問題はないだろう。そして、これらのケースで対立しているのは、基本的に二つの相容れない行為をしたいとする欲求同士の対立である。理性の命令、道徳的な指令は欲求ではないとする立場もあるだろうが、ここではヒュームの理論の検討を目的としているので、人間の心理的現象も全て因果的な説明を

受けるものとする。そして、行為を導くものは、それがどのような起源を持つものにせよ、動機であり欲求であるとするヒューム自身の前提を採用しておく。さて、そうした場合、両者が明らかに起源を異にする動機であるということは、誰の目にも明らかである。もちろんヒュームの目にもである。この起源が異なるということを、一般には「理性」と「情念」ということに割り振っているわけであるが、ヒュームはこの割り振りが誤っている、「理性」とされるものはある種の「穏やかな情念」、この場合は「道徳」を支えている情念であると考えてるのである。

ヒュームがこの様な見立てをするのは、道徳的区別すなわち善悪の判断が理性によるものではなく、情念(ある種の特殊な情念)によるものであるというヒュームの説に由来する^⑧。つまり異なる起源を持つということは、一方が特殊な起源の情念であることで説明し、そして、同じ情念にしては精神に対する感じられ方が非常に異なるのはなぜかという点に関しては、一方が「穏やかな情念」であるということの説明するのである。ここでの「穏やかな情念」とは、道徳的判断をする精神の状態がいつも穏やかであるというわけではないということを考えれば、情念のもたらす精神の動揺の程度なのではなく、情念の種類を表しているということは間違いない。ヒュームはこのようにある特殊な形成過程を持つ道徳的行為を命じる欲求である「穏やかな情念」が、一般的な意味での「情念」である欲求と対立しているとき、「理性」と「情念」の戦いという現象が起こるのである、というのである。

さて、このように理解したとき、この「理性」と「情念」の対立は、異なる「欲求」同士の対立の一例に過ぎないものとなり、例えば食欲と性欲を同時に満たすことが出来ない場合に、両者の間の対立がおこるといことと何ら変わらない、ということになるように見える。だが、果たして、それは事態を正しく記述していることになるだろうか。

先に提示した例を考えてみよう。直接的に対

立というべきものが起きるのは、「財布を届けたい」という欲求と「財布を我が物にしたい」という欲求であるが、両者は決して同列のものではない、しかも本当に葛藤を起こしているのは「財布を我が物にしたい」という欲求と「それはなすべき行為ではない」という判断なのではないのだろうか。つまり、肝要なのはここで「理性」といわれているものは、ある行為の結果を欲求の対象とするのではないということである。「財布を届ける」ことはそれ自体が目的なのではない。「財布を届けよう」とするのは、それが正しいとされている行為だからである。いっぽう「財布を我が物にしたい」という欲求は、それが悪いことであるが故にするという場合も皆無とはいえないだろうが、通常は行為の対象自体が欲求の対象となるものである。二つの欲求は明らかに同列のものではない。もちろんヒュームはこれに対しては、であるからこそ道徳的感情はある特殊な感情なのだというであろう。それを認めたとしても、この「穏やかな情念」が一定の判断を媒介にして、他の欲求と対立しているということは認めねばならない。しかも、この判断は、行為あるいは行為の動機に関する判断である。すなわちある種の欲求を否定し、ある種の欲求を肯定することにおいて成り立っている。その意味では「情念」についての「情念」あるいは「欲求」についての「欲求」、つまり「メタ情念」ないし「メタ欲求」とでも解すべきものなのである。もちろん、ヒュームはこのような「情念」も「情念」であるというだろうし、このような「情念」が生じてくるもとの道徳的判断も「情念」によるものだというであろう。しかし、もし、「穏やかな情念」がこの様なものであるという我々の解釈が正しいのであれば、このような情念は「間接情念」以上に入り組んだ観念と印象の関係の複合によって説明する他はないであろう。ヒュームの論述はこのような方向にさらに探究を進める契機をその中に有しているにも関わらず、「理性」と「情念」を必要以上に対立させる二分法的思考に陥っているが故に、それを見逃してしまっているのである。

さらに挙げておいたもう一つの対立の場面、すなわち「長期的利益」の計算に基づく欲求と衝動的な欲求との間の対立であるが、これについても同様な考察が当てはまるといえよう。ヒュームであれば、両者はともに自己利益の欲求に基づいているのだから、同種の欲求同士の対立であると断言するであろうが、やはり少し立ち止まって考えてみれば、この長期的な利益という観点も、その観点から今の行為に対する欲求を判定するという判断に基づいて、行為を統制するのである。その意味で長期的利益の計算に基づく賢明さに関してもまた、単純に「理性」の影響力を排除するわけには行かないのである。いやそれどころか、この「理性」の影響力が、欲求についての欲求という形になって現われているということは、こちらの事例のほうがより明瞭に示されているかもしれない。

IV

以上瞥見したように、「理性」と「情念」の関係についてのヒュームの一般的見解は必ずしも承服できるものではない。何よりヒュームが具

体的な場面で行っているような分析から見ると、「理性」と「情念」を截然と分ける彼の一般理論は、事態を正確にとらえるためにはむしろ足かせとなっている感がある。このような態度をヒュームが取っている理由の一つは、ヒュームが論敵として念頭に描いていた相手が道徳に関する合理論者の主張であったということにある。そして、それはヒューム自身の旗幟を鮮明にするという意味では大きな効果があったと思われる。しかし、本当にヒュームが『本性論』において行いたかったことが、「道徳感情説」か「合理論」かの判決なのではなく、様々な心的現象の因果的解明だとすれば、これらのヒュームの行文は少なからず読者にめくらしの作用を及ぼしたように思われる。「理性」と「情念」の関係のヒュームの体系の中でのあるべき姿は、ヒュームがはっきりと言明していることだけではなく、彼が分析している行為の動機の具体的な因果的な機構を今一度丁寧に考察することでしか、明らかにすることは出来ないように思われるのである。

註

- ① 『人間本性論』の引用や言及は現在標準的な形となっているように、David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed by L.A.Selby-Bigge & P.H.Nidditch, Oxford University Press, 1978のページ数と、David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by D.F.Norton & M.J.Norton, Oxford University Press, 2000、に付されている段落番号の両方を併記して示すこととする。
- ② ヒュームがこのことを取り上げるのは情念論であり (T413/2.3.3.1) 道徳論ではないが、道徳の起源を理性に求めるか感情に求めるのかという論争において、人間を行為へと動かすものが何であるかという問いが決定的に重要であるとヒュームが考えているが故に、ここに取り上げられていると思われる。
- ③ 情念と理性の戦いという「この思考法に、古代と当代の道徳哲学の大部分に基づいているように思われる」 (T413/2.3.3.1)
- ④ 但し、道徳に対する論考は、本論文の主題である理性と情念の関係に関する限りにおいて、最小限にとどめる。
- ⑤ ヒュームにおいては、正確には心的作用の対象となる存在者を指す名辞は「知覚 (Perception)」であるが、ここではロック以来の伝統と、ヒューム自身が「観念 (Idea)」という語で「知覚」を代表させて論じている場合がほとんどなので、観念説という語を使用することにする。
- ⑥ ヒュームによる「現実 (Reality)」の定義は (T108/1.3.9.3) を見よ。
- ⑦ ヒュームは感覚の印象又は観念が提示する快と苦に基づいて情念が生じるというが、そうではなく、人間の本性に由来するもので、むしろそれらが快苦を産み出す情念の存在を認めている。(T439/2.3.9.8)、この

ような情念は、その発現において知性的な認識を前提としていないと言える。

- ⑧ 意志の定義は (T399/2.3.1.2) を見よ。
- ⑨ 周知のようにプラトンの魂の三分説では、欲望と気概という二頭の馬を御者である理性が統御するという形になっているが、プラトンの言う欲望も気概も、ヒュームにおいては「情念」のカテゴリーに含まれるものである。
- ⑩ トマス・リードの行為論に関しては石川徹「トマス・リードの心の哲学(4)」及び「トマス・リードの心の哲学(5)」(いずれも『香川大学教育学部研究報告第一部』第125号、2006年3月に掲載)を参照せよ。
- ⑪ この点がヒュームが最も強調する点である。例えば (T414/2.3.3.4) を見よ。
- ⑫ (T418/2.3.3.10) を参照せよ。
- ⑬ 註⑫を参照せよ。
- ⑭ ヒュームのこの主張は『人間本性論』第三巻第一部において展開されている。